

令和2年度 hug くむ保育園大岩評価書

I 経営の重点に関わる事 評価段階（A：大変良い B：まあまあ良い C：あまり良くない D：全然良くない）

重点目標	評価指標	評価	自己評価
1. 園教育（卒園目標）：社会に出ていく為の基礎ができた子 保育目標：「内面的安定」「自立心」「自律心」 育成目標：「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」			
社会に出ていく為の 基礎ができた子	特定他者との安定した愛着の形成がなされ、内面的安定が図られるよう向き合っている。	園児が登園してきた際安心して1日を過ごせるように必ず1対1で挨拶をしたり、あまり園児と接する機会のない職員（調理員等）は機会があれば安心感が伝わるよう穏やかに接したりすることを心掛けている。それを続けている結果として、保護者様から、「先生の事を信頼しているように見える」「迎えに行くといつも笑顔でいる」という嬉しいお言葉を頂いた。	A
	人や物に関心を示し（気づき）探索活動の範囲を広げられるよう向き合っている。	子どもと話す時間や絵本の時間等に、子どもたちが興味を広めたり深めたりできるよう考えられている。今後も様々な活動ができるよう、さらに活動内容や遊びの工夫を行っていくことが必要。	B
	探索活動の中での不安・怖れ、あるいは喜び楽しさを受け止め、内面の安定を図れるよう向き合っている。	探索活動の中での様々な感情をただ受け止めるのではなく、保育士は“安全基地”ということ意識して、子どもが不安になったときには「ここに帰ってくれば大丈夫」喜びや楽しさは「先生にも伝えたい」と思ってもらえるような保育を行うことができた。後半部分が意識できている職員とそうでない職員がいたので全員が意識できるようにしていきたい。	B
	「～したい」という、自らの考えを持てるよう子どもに向き合い、また子どもの考えをくみ取れるようにしている。（行動しやすいよう促している）	大人の考えやルールを伝えるのではなく、一人一人の考えや思い、発達に合わせて代弁したり伝え方を伝えたりと援助を変え、その思いをできるだけ叶えられるようにすることで、“伝わる”“伝える”楽しさを味わえるよう関わっている。	A
	行動によって生じた結果に対し、自己肯定感（自己有能感）を持つ事ができるよう向き合っている。	「できたことを褒める」ということは全職員ができていた。でもそれだけでは自己肯定感（自己有能感）を育むことができないため、良い結果でも悪い結果でもそれを子どもが次につなげられるような関りを行えるとより良い保育になると考える。	B
	お友だちの気持ちに気づけたり、次の行動を見通すことができる促しをしている。	保育者が伝えるだけでなく、一緒に見たり、考えたりできるような声掛けや問いかけができていた。まだ、先の見通しや自分と環境との融和を図るのは難しいため、言葉だけでなく視覚や聴覚でもわかるような環境構成の工夫を保育に組み込めるとより良い保育になる。	B

2. 保育方針		
評価指標	評価	自己評価
根拠に基づく保育を実践します。	日々の保育の中で子どもたちの姿を把握し自分なりの根拠を持って関わっている。どのような発達の根拠があるのか、行っている保育が今の子どもに合っているのか等事例検討を通して学びながら保育を行っている。全職員が子どもの姿と発達を繋げることや理解を深めていくことを楽しめるとより良い保育ができると考える。	B
子ども自身の発達状況や個性を尊重します。	活動内容、環境、援助等、個々に合わせたものになるよう心掛けて保育をしていた。それを他の職員と互いに声を掛け合い伝え合いながら共有できると、子どもへの援助が職員で統一できると考える。職員間の連携も重要視していきたい。	B
子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。	大人の都合、大人の解釈で考えてしまわないようにする事で、子どもとの信頼関係を築くことができた。今後は心理的な面だけでなく、発達や体の成長等物理的な理解も深め子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えられると良い。	B
子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。	一人一人の子どもの成長を見ながら、子どもの話を聞いたり代弁したり子ども同士で話ができるような援助をしたりができています。それだけで終わらせるのではなく、その後のフォロー（導く）まで考えていけると良い。	B
「いいところ見つけ」を心がけます。	この目標自体が「いいところを見つける」だけではなく、「いいところみつけをしてそこを伸ばす」ことが目標である。見つけることは全職員ができているため、みつけたことを職員間で共有し更に伸ばしていけると良い。子どものいいところ見つけだけでなく職員のいいところ見つけを行い、それを参考に自身のスキルアップに繋げている職員もいた。	B
やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。	2歳児になると一緒に考えたり相談し合ったりすることで、子どもたちも意欲的に活動を作ることができた。まずは保育者が活動を楽しむことが大切である。楽しみながら、導入や活動内容の工夫をしていくと子どもたちも歳児関係なく意欲的に活動に参加してくれると考える。	B

II 施設機能に関わる事

大項目	中項目	評価指標	評価	自己評価
小規模保育施設における保育	発達の連続性を考慮した保育	0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。	発達の連続性については、事例検討や外部研修でまだ学んでいる途中。基本的な発達で学んだことや日々の保育の中で見ている子ども自身の発達を関連付け、実践の中で出来るようになっていけると良い。	B
	一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるように子どもの想いに寄り添い関わっている。	ご家庭との連携をとり、一人一人の生活、経験、発育歴の把握はできていた。子どもたちが安定した穏やかな気持ちで過ごすためには職員間で伝え合うこと、助け合うこと等の連携が大事である。	B

	環境を通して行う保育	子どもの成長につながるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。	形にとらわれないよう、様々な環境を試しながら、子どもたちの遊びを環境でコントロールできるようにしている。1つの遊びを遊びの展開に応じて環境も変化させていけると“子どもが遊びに飽きる”ということもなくなるのではないかな。	B
安全管理 ・指導	事故防止・防災	様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作 り、園児にも安全行動を身につける指導をしている。	訓練に関しては繰り返していくことで、職員全体の意識の変化や子どもが流れを覚えることができていた。今年度は大きな怪我が起きてしまい、それに対して保育士間で意識の差が生じていたように感じた。職員全員が自分事として捉え、対策を考えていけると良い。	C
保健管理 ・指導	生命の保持	・安定した生活リズム（睡眠・食事・排泄等）の管理 を行っている ・「おいしく・たのしく・たべる」をテーマに、様々な 形で食に関わる体験ができるよう工夫している。	一人一人のリズムを把握し、管理が行えていた。1歳児のトイトレのタイミングを保育士が見極めていく必要がある。 食育に関しては調理員が行事を給食やおやつでも盛り上げてくれたり、偏食があっても少しずつ食べられるようになったりと「楽しく食べる」を重視した工夫を行ってくれました。保護者様にも給食の様子が伝わるような発信の工夫を行っていきたい。	B
	健康教育の充実	・園児の健康状態の把握に努めている ・園児の発育・発達状況の把握に努めている。 ・園児に手洗い・うがい等の生活習慣を身につける指導をしている。	健康状態、発育、発達状況の把握はできている。生活習慣に関しては、手洗い以外はできないことの方が多かったため、感染症対策の観点からもできるような保育の工夫や時間配分を考える必要がある。	B
特別支援 教育	支援体制の構築	・全職員が園児一人一人の子どもを理解し、子どもの 関わりに対し共通認識を持ち援助をしている。 ・特別な支援が必要な園児に対応するため、発達障害 や病気、その他の特別な支援について、様々な知識の 研鑽に努めている。	全職員が共通認識を持つことができているとは言えない。子どもと関わる中で感じたことや出来たこと等を担任間での共有は出来たが、他の職員との共有ができていなかったのので今後は全職員が同じように理解し、援助できるようにしていくことが課題である。	B
組織運営	組織体制の充実	園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員 間で連携を取り合い、保育を進めている。	連携が足りていないように感じた。会議での伝達や担任が作成した書類を見て、どのようにクラス運営をしていきたいのか、行事を進めていきたいのか等担任の想いを汲み取って保育を行えるようにしていきたい。	B

研修	研修体制の充実	保育理念・目標・方針を実践に活かせる研修ができています。また実践に活かせる具体的な手立てや教材研究を行っている。	今年度の事例検討では一人一人のスキルアップにつながる内容が多くとても良い会だった。まずは新人研修で行う“保育理念・目標・方針”をしっかりと理解することが大切だと感じた。理解している人とそうでない人では研修に臨む姿勢が変わってくるように思う。 教材研究も日々の保育の中で試し、発見できるとより良い保育の提供ができる。	B
教育・保育環境の整備	教育・保育環境の充実	子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自身も目的を持った環境や教材の工夫をしている	子どもたちが「楽しい」と思えるよう、発達や好みに応じて遊びを変化させている。また「またやりたい」と思えるよう、子どもたちからアイデアを引き出したり子どもの発言にも耳を傾けたりしながらそこから保育が展開できるようにしている。それができる職員とそうでない職員にわかれるため、全職員ができるようにしていきたい。	B
家庭との連携	家庭環境への支援機能の充実	保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくり、園からのおたよりを発行している。	今年度、保護者様から園としては厳しいご指摘を頂いた。それを真摯に受け止め、改善に努めたい。 保護者様には必要な時に話しかけるのではなく、平日頃から子どもたちの園での様子を伝えるようにしていき、何気ない会話の中から悩みや相談が聞けるようにしていきたい。	B
連携園との連携	連携園との連携の推進	連携園に親しみを持って交流する機会を作っている。	今年度は感染症の流行により、連携園との交流がほとんど出来なかった。このような状況下でも交流できる方法を考えていきたい。	C
地域との連携	信頼される園づくりの推進	園外保育や地域の多施設と交流し、近隣住民との触れ合いに努めている。	職員自身もすれ違う方への挨拶を欠かさず行っているからか、近隣の皆様にもお声がけ頂くようになった。敬老会では感染症の流行もあり、例年通りのやり方は困難であったが、違うやり方を現場で考えられ良かった。	B

Ⅲ 園としての保育の総括

今年度は通院を要する怪我の発生と、保護者様からのご指摘が大きな反省点である。怪我に関しては職員の連携がうまくいかなかったことが課題である。職員間で声を掛け合うことと、誰がどこで何をしているのかを把握し自身がどのように動いたら良いのかを考えるスキルが必要だと感じた。

保護者様からのご指摘に関しては、昨年度施設評価の総評でも記入した当園の“保育理念・目標・方針”の落とし込みが不足していた。園の基本が職員に浸透していないと保育のやり方に統一性がなくなってしまい、子どもたちが困惑してしまうため今後も指導が必要だと感じた。

怪我やご指摘について臨時会議で対策を考える機会を設けた。様々な対策案を出し合い「まずはやってみよう」という前向きな話し合いができていたのはとても良いことだと思う。全職員が自分事として考え意識していけると、より良い保育の提供ができるのではないかと。

Ⅳ 園としての経営の総括

今年度も園児の獲得が難しく、3月時点で1枠残る結果となってしまった。hug くむ保育園を地域の皆様にも知っていただくために、令和3年度より園開放を行うこととSNSの更新率の強化を行っていきたくと考えている。それを行うことで、地域の皆様にも知って頂くだけでなく保護者様にも園での様子を知って頂く機会としていきたい。

保育士の業務量について、今年度より様々な改善を行ったことで昨年度よりは業務が減少したのではないかと感じている。まだ担任業務が滞ることもあるため、これで満足するのではなく時間の使い方や業務内容の見直し、書類の改善を行っていく必要がある。現状に満足するのではなくどのようにしていくとやりやすいのか楽しい保育ができるのか業務効率化につながるのか、日々職員のアイデアもいただきながら改善していきたい。